

激動する 世界と日本



藤井 敏喜
蔵書

新連載

2012年夏、世界は激動し

ている。既存の秩序が崩れ、世界地図はまさに書き換えられつつあるのだ。その変貌の実体を、5回にわたって概観してみよう。

も、08年以来、急増しているIIグラフ参照。

11年末の米国の原油生産量は、日量784万バレルだったが、20年にはこれが日量1560万バレルと、ほぼ倍増すると予測されている。

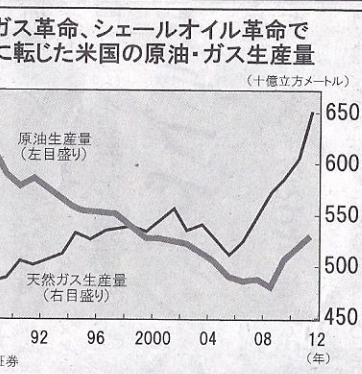
第一回は、エネルギー革命で復活するアメリカである。米国では「シェールガス」「シェールオイル（別名・タイトオイル）」という全く新しい天然ガスと石油が大量に見えられて、

米国発エネルギー革命が「原動力」

大量生産が軌道に乗っている。シェールガスの生産が先行し、その新技術を活用して、掘削されるシェールオイルの生産

ギ一革命のおかげである。米国内のエネルギー生産増加は20年の時点で、米国経済成長率を2%から3%押し上げ、経常赤字を対GDP比で1・2〜2・4%押し下げる見込みである。

米国内のエネルギー革命が、中東から足を洗い、対中戦略にシフトさせることも可能にしている。米国発のエネルギー革命は、世界秩序全体の再構築の大きな原動力となっているのだ。



これが意味するのは、「米国経済復活」と「基軸通貨ドルの延命」である。短期的に見れば、米FRBは、恐らく量的緩和第3弾(QE3)を実施するところから、さらなる円高ドル安が進むだろうが、中長期的に見れば、ドルはユーロにも円にも、強い通貨として復活するであろう。

日本もこのエネルギー革命の恩恵を大いに享受する側の国である。11年の日本の原油輸入額は11兆円、天然ガス輸入額は5兆円だったが、近い将来、大幅に減少するだろう。輸入総額が半減すれば、GDPを2%押し上げる力がある。そればかりではない。秋田県でシェールオイル油田が複数箇所発見されているのだ。これも日本経済の押し上げ効果になることは間違いない。

ふじい・けんき 国際政治学者。1952年、東京都生まれ。早大政経学部卒業後、米ハーバード大学院で政治学博士課程を修了。ハーバード大学国際問題研究所・日米関係プログラム研究員などを経て帰国。テレビやラジオで活躍する一方、銀行や証券会社の顧問、明治大学などで教鞭をとる。現在、拓殖大学客員教授。近著に「パカで野蛮なアメリカ経済」（扶桑社新書）、「超大恐慌で世界の終わりが始まる」（日本文芸社）。

赤字を減らすだけではない。国内エネルギー生産の増加は、中東の安全保障に関する米国のコミットメントが小さくなり、国防費の大幅削減につながることを意味する。これが米国の財政赤字削減に貢献することは言うまでもない。米国は、戦略の中心を、東アジア、特に中国の軍事膨張主義を牽制することに置き始めた。